

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370608

研究課題名(和文)日本人の言語行動におけるポライトネスー異文化理解教育の方法論開発

研究課題名(英文) Politeness in Japanese Speech Acts: Developing a Method for Promoting Intercultural Understanding

研究代表者

松村 瑞子 (Matsumura, Yoshiko)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：80156463

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで研究代表者および分担者が行ってきた研究で開発した日本語ポライトネス指導教材・教師用手引書を基に、国内外の日本語教育関係者と連携して日本人の言語行動における日本語ポライトネス指導を実践し、異文化理解教育促進のネットワークを作った。

まず、メディア等を利用した効率的指導方法・コースデザインを作成し国内の大学・大学院における指導を基に指導法を確立した。次に、海外の日本語教育機関における異文化理解教育の実態を調査し、中国、韓国、台湾、ロシア、アメリカ、ベトナム、エジプト等の日本語教育関係者と連携し、海外での異文化理解教育促進のためのネットワークを形成し、継続的実施の基盤を作った。

研究成果の概要(英文)： In this project, by using the teaching materials and the manuals for Japanese teachers we had developed, we practiced teaching politeness in Japanese speech acts both within and outside Japan and have built an international network for promoting intercultural understanding

First we delivered lectures and classes on Japanese politeness in Kyushu University and Nagoya University, Incheon University, and so on, and decided on the teaching method. Then, after investigating the actual conditions of teaching intercultural understanding in Japanese educational institutions outside Japan, we have built an international network for promoting intercultural understanding teaching. Based on the network, we are planning to promote intercultural understanding, in cooperation with Japanese teachers in such foreign universities as Shanghai International Studies University, Incheon University, University of Arizona, Irkutsk State University, and so on.

研究分野：言語学(語用論)、社会言語学

キーワード：ポライトネス 言語行動 語用論 異文化理解教育 配慮表現 異文化コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまで研究代表者および分担者が行ってきた研究「日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析」、「談話分析に基づく日本語ポライトネス指導教材開発」、「実践日本語ポライトネス技術訓練方法の開発」の研究内容を発展させ、国内外での継続的な異文化理解教育ネットワーク形成を目指すものである。

研究の着想に至った経緯

(1) 日本語の談話に特徴的なポライトネス研究：ポライトネス理論として最も強い影響力をもつ研究として Brown and Levinson (1978) がある。この理論はフェイスという単一概念を用いて普遍的ポライトネス理論を出したという点では画期的な理論であり、30年以上経った現在においてもポライトネスを議論するには必ず引き合いに出される(宇佐美 1998、滝浦 2008等)。しかし、この理論は取り分けアジアの言語学者から批判されてきた(井出他 1986、Matsumoto 1988、Gu 1990等)。さらに、様々の文化のポライトネスを同一基準で定義することの難しさも指摘されている(Haugh 2004)。

本研究代表者・分担者は「日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析」(平成10年度～平成12年度科学研究費基盤研究(C)(2))において、社会的地位、年齢、性別、会話主導責任の有無から上下関係があると考えられる3つのタイプの会話(大学教授と学生の会話、医者と患者の会話、テレビのインタビュー番組の司会者とゲストの会話)を録音・文字化した資料の談話分析を行い、日本語の談話においては、明瞭に文が終止されるとき、新しい話題に移行するとき、結論を表明するとき等、節目節目に「わきまえ」(井

出他 1986・井出 2006)の表明が必須であること、また使用されるポライトネス・ストラテジー(Brown and Levinson (1978))の種類や頻度も会話参加者の上下関係や状況によって左右されていること等、日本語のポライトネスでは「わきまえ」と「ストラテジー」が複合的に組み合わせられてダイナミックに発展していていることを示した。

(2) 日本語母語話者と学習者の認識の相違に焦点をあてた日本語ポライトネス指導教材開発：国立国語研究所(2006)が、敬語研究から発展した日本語の配慮表現についての調査研究を行って以来、国内では配慮についての研究が数多く行われてきた(彭飛 2005、山岡他 2010)。日本語のポライトネスにおいては、「配慮」は重要な要素であることは事実なのだが、日本人の「配慮」や「心配り」は、他の言語においては必ずしも日本語におけるような効果を与えるわけではなく、誤解につながることもしばしばである(ザトラウスキー 1993)。そこで、研究代表者・分担者は「談話分析に基づく日本語ポライトネス指導教材開発」(平成20年度～22年度科学研究費基盤研究(C)(2))において、韓国人および中国人・台湾人大学院生に「日本人には丁寧と感じられるが、学習者には丁寧過ぎる、無礼、不自然と感じられる日本人のポライトネスを含む会話場面」を収集してもらい、その中で典型的と思える場面を抽出し、日本人および韓国人・中国人の10代～50代の男女にアンケート調査を行い、日本人と学習者の間の認識の違いを明らかにした。それを基に「日本語ポライトネス指導教材」を開発した。

(3) 教師用手引書の作成：(2)で作成した「日本語ポライトネス指導教材」を国内外の日本語教師が効果的に使用していくためには、教師用手引書を作ることが不可欠である。そこで「実践日本語ポライトネス技術訓練方法の開発」(平成23年度～25年度科学

研究費基盤研究(C)(2)においては、先ず日本語版の教材の素材についての解説、日本語ポライトネスについての解説、その他語用論的に必要な解説や情報をまとめた教師用手引書を作成した。さらに、この教材を国内外で広く使用するために、教材を英語、中国語、韓国語に翻訳した。さらに、この研究内容の一部を、研究代表者および分担者の共同研究として2013年7月にロンドン大学 SOASで開催されたポライトネスに関する国際学会 *Teaching and Learning (Im)politeness* で発表した。

2. 研究の目的

本研究は、これまで研究代表者および分担者が行ってきた研究で開発した日本語ポライトネス指導教材・教師用手引書を基に、**国内外の日本語教育関係者と連携して日本人の言語行動における日本語ポライトネス指導を実践し、異文化理解教育のネットワークを作ることを目的とする。**そのために、先ず、メディア等を利用した効率的指導方法・コースデザインを作成し、国内の大学・大学院における指導を基に教授法を確立する。次に、海外の日本語教育機関（中国、韓国、ベトナム、タイ等のアジアの国々に加え、ロシア、アメリカ等の欧米等）における日本語ポライトネス指導の実態を調査し、そこでの日本語教育関係者と連携することで海外での異文化理解教育のネットワークを形成し、継続的实施を目指す。

3. 研究の方法

研究方法の詳細は以下の通りである。

(1) メディア等を利用した効率的指導方法の作成および教授法の確立：

先ず、教材中で掲載した映画やドラマ、マンガなどのメディアを利用しながら、これまでの研究で作成した指導教材・教師用手引書を用いて効果的に日本人の言語行動におけるポライトネスを指導する教授法を確立した。

(2) 日本国内の大学における授業の実践：

日本国内の大学および大学院（九州大学、日本赤十字九州国際看護大学、室蘭工業大学、九州工業大学等）の教員と連携し、日本語・日本文化、言語コミュニケーション、語用論等の授業において、(1)で作成した教授法を用いて授業を行い、必要に応じて修正加筆を行った。

(3) 海外の日本語・日本文化教育機関における日本語ポライトネス指導の実態調査：

次に、研究代表者および分担者が共同研究および指導を行ってきた日本語教育関係者を通じて、海外の日本語教育機関（中国、韓国、ベトナム、インドネシア、マレーシア、ミャンマー等のアジアの国々、アメリカ、ロシア等の欧米の国々）における日本語ポライトネス指導の実態を調査した。

(4) 海外の日本語教育機関における日本語ポライトネスに関する授業の実施：

実態調査に基づき、それぞれの国の指導実態を考慮の上、指導教材および教師用手引書に修正加筆を行った。その後、海外の日本語教育機関に赴き、そこでの日本語教育関係者と連携することで、日本語ポライトネスに関する講義や授業を行い、異文化理解教育のネットワーク構築を図った。その結果、これまで18年間東アジア日本語・日本文化フォーラムを共同で開催してきた韓国（仁川大学校）、中国（上海外国語大学）に加え、台湾（国立台中科技大学）、アメリカ合衆国（アリゾナ大学）、ロシア連邦（イルクーツク国立大学）とも連携して研究教育を進めることとなった。

4. 研究成果

(1) 効率的指導法の確立および授業の実践

研究分担者1は、マンガを素材とした異文化理解教育の方法を開発してきた。本研究では、先ず、分担者1が中心となり、教材中で掲載した映画やドラマ、マンガなどのメディアを

利用しながら、これまでの研究で作成した指導教材・教師用手引書を用いて、効果的な日本人の言語行動におけるポライトネス指導法・コースデザインを作成した。

作成した指導法およびコースデザインに基づき、日本語・日本文化、言語コミュニケーション、語用論等の授業において授業を行い、必要に応じて修正加筆を行った。

(2) 海外の日本語・日本文化教育機関における異文化理解教育の実態調査

研究代表者および分担者が共同研究および指導してきた日本語教育関係者を通じて、海外の日本語教育機関における日本語ポライトネス指導の実態を調査した。

中国については上海外国語大学(竇心浩准教授)、韓国については梨花女子大学(本多美保講師)・仁川大学(黄美玉教授・李健相教授)、台湾は国立台中科技大学(黄英哲准教授)、ベトナムのフェン・チャン氏(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程修了生)、インドネシア(ユスリタ・シアフィア九州大学大学院地球社会統合科学府大学院生)、マレーシア(カディジャ・ピンティ・オマル同上大学院生)、ミャンマー(イ・イ・ソ・ミン同上大学院生)、ロシアのイルクーツク国立大学(ナジェージダ・ウェインベルグ准教授)、エジプト(オムネヤ・アルサギール同上大学院生)と連携し、実態調査を行った。

(3) 指導教材・教師用手引書の各国語翻訳

日本国内外での授業の実践結果、および海外の日本語教育機関におけるポライトネス指導の実態調査を勘案して、これまで作成した、日本語・英語・中国語・韓国語教材を見直し改訂すると同時に、改訂版の教材および教師用手引書の一部をロシア語、ベトナム語、アラビア語に翻訳した。ロシア語・ベトナム語・アラビア語の教材は、日本語・英語・中国語・韓国語教材とともに以下のホームページに公開し、ダウンロードを可能にした。

<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~ymatsu/index.html>

更に、教師用手引書の入手方法についてもホームページ上に示した。

(4) 海外の日本語・日本文化教育機関における日本語ポライトネス指導および継続的指導のためのネットワーク構築

1 作成した指導教材、教師用手引書および教授法を用いて、以下の大学にて講義および授業を行った。

韓国仁川大学、台湾国立台中科技大学、アメリカ合衆国アリゾナ大学、ロシア連邦イルクーツク国立大学

2 上記の講義・授業および2015年3月に開催された東アジア日本語・日本文化フォーラムでの話し合いが基になり、九州大学大学院言語文化研究院および地球社会統合科学府は上海外国語大学と2015年度に交流協定を締結した。さらにロシアのイルクーツク国立大学とも2017年度中には交流協定が締結される見込みである。これらの交流協定を基に、ネットワークを構築して共同研究を行っていく。

3 さらに、上海外国語大学の竇心浩准教授、アリゾナ大学のキンバリー・ジョーンズ教授、台湾の黄英哲准教授、韓国の黄美玉教授・李健相教授とも連携して海外での異文化理解教育のネットワークを形成することを了解してもらっており、継続的実施を目指す。

4 また、研究代表者および分担者が指導したエジプト、ベトナム、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、ポーランド、イギリス、スリランカの大学院生・修了生を通じて更に異文化理解教育のネットワークを広げていっている。

5 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

松村 瑞子、(イン)ポライトネス研究の方向性 フェイス・ディザンメントの再概念化を受けて、東アジア日本語・日本文化研究 新機軸の日本語・日本語教育研究、査読有、第22集、2017、109-124

山路 奈保子、因 京子、アブドゥハン 恭子、英語で研究活動を行う留学生・研究者を対象とした日本語教育教材開発への示唆、北海道言語文化研究、査読無、第15号、2017、23-37

葛 欣燕、松村 瑞子、指示詞型フィルターの用法についての日中対照分析、言語文化論究、査読有、No.38、2017、41-58

大島 弥生、陳 俊森、山路 奈保子、因 京子、中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆 学習者・指導者の認識に着目して、AJジャーナル、査読無、第8号、2016、28-36

松村 瑞子、褒めとポライトネス 褒めは肯定的評価か、言語科学、査読無、第51号、2016、51 - 58

東出 朋、松村 瑞子、呼びかけ語の二人称対称人称詞 談話における特殊な機能を中心に、言語文化論究、査読有、No.37、2016、37 - 50

因 京子、森山ますみ、外国人看護師の職場における日本語学習 今日、そして明日、専門日本語教育研究、第17号、2015、17 - 22

村岡 貴子、因 京子、国内外の大学教員が語る日本語アカデミック・ライティング教育への期待と課題 自身の学習・研究・教育の経験から、専門日本語教育研究、第17号、2015、35 - 40

ウェインベルグ ナジェージダ、松村 瑞子、日本語の「丁寧さ」とロシア語の「ウエジリボシチ」、言語文化論究、査読有、No.35、2015、57 - 69

松村 瑞子、日本人の感謝表明とポライトネス、東アジア日本語・日本文化研究、査読有、第19集、2015、91-104

Wolanski, Bartosz and Matsumura, Yoshiko, Address Terms in Japanese Blogs as a Response to the Author 's

Self-Presentation, Studies in Languages and Cultures, Refereed, No.32, 2014, 1-10

山路 奈保子、因 京子、藤木 裕之、日本人大学生における文章作成技能獲得の様相 工学系専攻の大学院生による作文自己訂正から、専門日本語教育研究、第16号、2014、45-52

村岡 貴子、因 京子、「日本語アカデミック・ライティングの核心をつかむ」実施報告および受講者へのアンケート調査の結果と考察、銘傳日本語教育第17期、2014、1-22

[学会発表](計 13 件)

松村 瑞子、日本語のポライトネス、イルクーツク国立大学日本語研究会、2016年11月17日、イルクーツク(ロシア連邦)

山路 奈保子、日本語教員同士のつながりから広がる大学間交流、学生交流、第18回東アジア国際日本語・日本文化フォーラム、2017年2月4日、九州大学(福岡市)

山路 奈保子、因 京子、アブドハン 恭子、研究コミュニティを活用した主体的学習を支援する日本語会話入門教材の開発、専門日本語教育学会、2017年3月3日、横浜国立大学(横浜市)

Matsumura, Yoshiko, Teaching of Japanese Politeness: Focusing on Difference in Understanding between Japanese and Non-Japanese People, Kyushu University and University of Arizona Symposium: Topics in Language, Literature and Culture, March 21, 2016, The University of Arizona (Tucson, USA)

山路 奈保子、因 京子、アブドハン 恭子、英語で研究活動を行う留学生・研究者のための「サバイバル日本語」 シラバス再構築に向けて、専門日本語教育学会第18回研究討論会、2016年3月、京都産業大学(京都市)

松村 瑞子、日本人の言語行動におけるポライトネス、名古屋大学大学院日本語教育講座講演会、2015年11月13日、名古屋大学(名古屋市)

山路 奈保子、深澤 のぞみ、須藤 秀 紹、中級レベル日本語授業におけるパブリックスピーキング指導 「コンテキスト共有」に着目して、計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会 2015、2015年11月、函館アリーナ(函館市)

松村 瑞子、日本人の言語行動における
ポライトネス 異文化理解教育の方法開
発に向けて、第 16 回東アジア日本語・
日本文化フォーラム、2015 年 3 月 27 日、
仁川大学校（大韓民国）

因 京子、マンガ作品における女性ジェ
ンダー表現の教育利用に向けて：現実との
ずれを前提に、2015 年文化越境与社会性別
国際討論会、2015 年 10 月 31 日、上海交通
大学（中華人民共和国）

因 京子、大学初年次生のライティング
に対するメタ認知、韓国日語日文学会 2015
学術大会、2015 年 12 月 19 日、韓国外国語
大学（大韓民国）

高木 佳奈、山路 奈保子、口頭運用能
力の差をもたらす環境的要因の分析 日
本語コース終了後の研究留学生を対照と
した追跡調査、2015 年度日本語教育学会
秋季大会、2015 年 10 月、沖縄国際大学（那
覇市）

高木 佳奈、山路 奈保子、自律的学習
スタイルを獲得する上で学習者が抱える
問題 日本語学習者へのインタビュー調
査から、2014 年度日本語教育学会秋季大
会、2014 年 10 月、富山国際会議場（富山
市）

山路 奈保子、深澤 のぞみ、須藤 秀
紹、パブリックスピーキングにおけるコン
テキスト共有 「ビプリオバトル」の導入
部の観察から、2014 年度日本語教育学会
春季大会、2014 年 6 月、（東京都）

〔図書〕（計 11 件）

松村瑞子、単アイテイ（編）、平成 28 年
度日本語資料集、九州大学大学院比較社会
文化学府・地球社会統合科学府、2017、170

松村瑞子・因京子・山路奈保子・TRANG
HUYEN、日本語・ベトナム語 日本人の言
語行動におけるポライトネス指導教材、
九州大学言語文化研究院、2017、149

松村瑞子・因京子・山路奈保子・Nadezhda
Weinberg、東出朋、日本語・ロシア語 日
本人の言語行動におけるポライトネス指
導教材、九州大学大学院言語文化研究院、
2017、156

松村瑞子、梅佳（編）、平成 27 年度日本
語資料集、九州大学大学院比較社会文化学
府・地球社会統合科学府、2016、306

松村瑞子、王丹丹（編）、平成 26 年度日
本語資料集、九州大学大学院比較社会文化学
府・地球社会統合科学府、2015、306

〔その他〕

ホームページ等

[http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~ymatsu/
index.html](http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~ymatsu/index.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松村 瑞子 (Matsumura, Yoshiko)
九州大学・大学院言語文化研究院・教授
研究者番号：80156463

(2) 研究分担者

因 京子 (Chinami, Kyoko)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・
教授
研究者番号：60217289

山路 奈保子 (Yamaji, Naoko)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号：40588703

(4) 研究協力者

翻訳協力

ウェインベルグ、ナジェージダ (Weinberg,
Nadezhda) ロシア語

東出朋 (Higashide, Tomo) ロシア語

フエン、チャン (Huyen, Trang) ベトナム語

オムネヤ アルサギール ハサン (Omnia
Arsagheer Hassan) アラビア語

本多美保 (Honda, Miho) 韓国語

李曦曦 (Lee, Xixi) 中国語

ヴォランスキ、バルトシュ (Wolanski,
Bartosz) 英語

リーダー、ローズマリー (Reeder,
Rosemarie) 英語